

全国高専OB会の活動と秋田への想い

14年11月15日
第3回共同研究会

4期機械・環境カウンセラー
畠中豊 2014.11.15 17:10

I. 全国高専OB会とは

- そもそも
- 全国高専OB会
- 広報誌「赤とんぼ」の発行継続
- 突然のインタビューと入会
- 全国高専OB大会(というささやかな集まり)
- 一関大会のホスト役
- そして2014拡大東京大会の盛り上がり

II. 秋田へ想いとUターン

- 故郷企業の元気の無さ
- 取りあえずUターン
- 再生可能型エネルギーの必然
- エネルギー需給データベースとの出会い
- 北国の膨大な熱需要
- 地域で取り組める小粒のエネルギー源は？
- バイオマスの熱利用という視点
- これまでに形になったもの
- これからの活動

I . 全国高専OB会とは

そもそも

- 全国に散らばる高専OBはどう活躍している？
- 長野高専OBの素朴な想い
- 九州高専OBの呼応
- そして有志による「ヒューマンネットワーク高専(HNK)」の設立
- 第1回の総会：1997年
- 各高専の同窓会が連携しているケースもある

全国高専OB大会(というささやかな集まり)

拡大高専OB大会:1997年以降毎年開催

- 2014年:東京(荒川キャンパス)
- 2013年:一関(一関高専)
- 2012年:愛知(豊田高専)
- 2011年:有明(有明高専)
- 2010年:奈良(奈良高専)
- 2009年:菅平(長野高専)
- :
- 1997年:第1回大会

広報誌「赤とんぼ」の発行継続

広範囲に活躍するOBに直接インタビューし編集



突然のインタビューと入会

- ある日突然メールが飛び込み、この広報誌編集者からインタビューの申し入れを受ける
- インタビュアーも高専OBの某新聞社論説委員だった
- そして「ヒューマンネットワーク高専」へ入会させられる
- 初めて総会へも参加(@菅平)

一関大会のホスト役

- その後毎年の総会に参加する中、東北での開催を提案されホストに指名される
- 2013年、震災復興と高専(OB)の関わりをメインテーマに開催
- この回から、世代の異なる若いOBの参加を呼び掛ける(世代間交流)
- 高専ベンチャーや高専カンファレンスを引っ張る若いOBを招待
- アフリカでテロの犠牲になった3名の高専OBの級友による追悼も
- 同時に震災地の復興視察ツアーも実施

そして2014東京大会の盛り上がり

- やや強引に「機構」も引っ張り込む
- 今回から若手OBが開催事務局を牽引
- 更に高専OB経営企業からの寄付も
- 更なる広がりを期待



II. 秋田への想いとUターン

故郷の元気の無さ

航空機産業を向いた企業コンソーシアムの講師として久々に帰省して見たものは

- 空き工場の多さに唖然
- 20世紀型産業の下請体質の限界を見た思い
- コメとなまはげ・竿灯しか？ 売るもののが無い「**超高齢化」「消費型の地域**」
- 震災の余波で、更に疲弊が進んだ？
- 単なる復興ではなく、**新たな産業起こしの必要性**を痛感
- でも一個人に何ができるのか？

取りあえずUターン

考え込んでも仕方が無いので、取りあえず単身赴任Uターンを決め、先ずは「東北ネットワーク」作りに着手

- ・ 東北6高専+高専OB企業ネットワーク
- ・ 環境カウンセラーネットワーク
- ・ 風水力・バイオマス利活用ネットワーク
- ・ EA21審査人ネットワーク
- ・ 商工会ネットワークなどなど

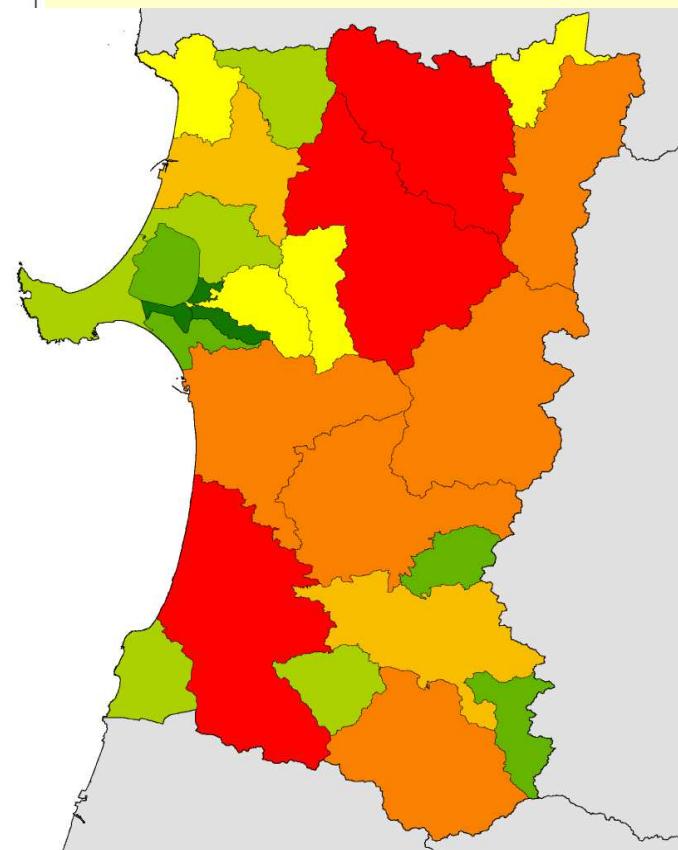
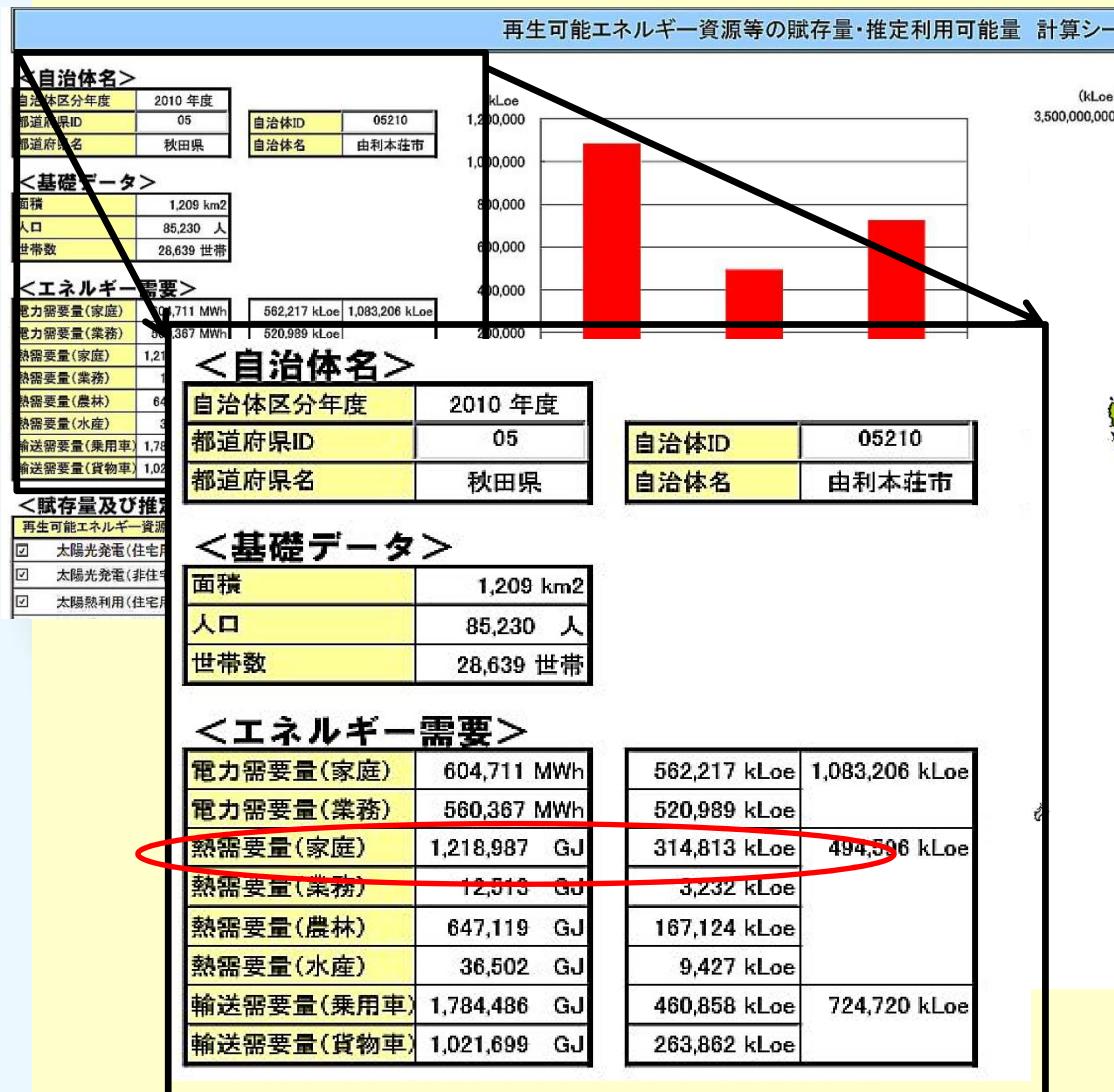
そして東北の山々も登りながらネットワークを辿つての「取りあえず訪問行脚」を実行

再生可能型エネルギーというKW

- 環境に負荷を与えないためには、持続可能なエネルギー源(太陽光やその派生エネルギー)=**再生可能型エネルギー**しかないという明白な結論
- しかし大資本や大企業にしかできない事に中小企業や市民が手を出しても無理がある
- エネルギー=電力や液体燃料というしがらみを切って見えてくるもの

エネルギー需給DBとの出会い

「緑の分権改革推進会議」データベース



北国の膨大な熱源用エネルギー

- 人口8万人あまりの地方の小都市でさえ、家庭用の熱需要は、石油換算で約**300億円/年**を消費
- その殆どは、**暖房・給湯**需要
- しかもエネルギー源は、殆どが**灯油+電力**
- 支払ったお金はほぼ全てが県外へ流出

地域で取り組める小粒のエネルギー源は？

地域の企業や個人レベルで取り組めるものは、

- バイオマス
- 地中熱
- 小水力
- 小型風車
- 太陽熱温水(温風)器、太陽熱デシカント冷房
- 小規模太陽光発電

などに限られ、大型風力発電や地熱発電等は、事実上大手資本、大企業にしか手が出せない。

バイオマスの小規模熱利用という視点

バイオマスとは

- 木質エネルギー(薪、チップ、ペレット燃料等)
- バイオ燃料(エタノール、菜種油等)
- 農業残渣(もみ殻、ワラ等)

など

しかも地元でお金が回り、雇用も生まれる仕組みと
することが必須

これまで形にできたもの
岐阜で開発したもの
輻射型ペレットストーブ



小型ペレタイザー



これまで形になったもの
故郷で企業を後押しした結果
木工廃材のペレットプラントの稼働、小売の開始



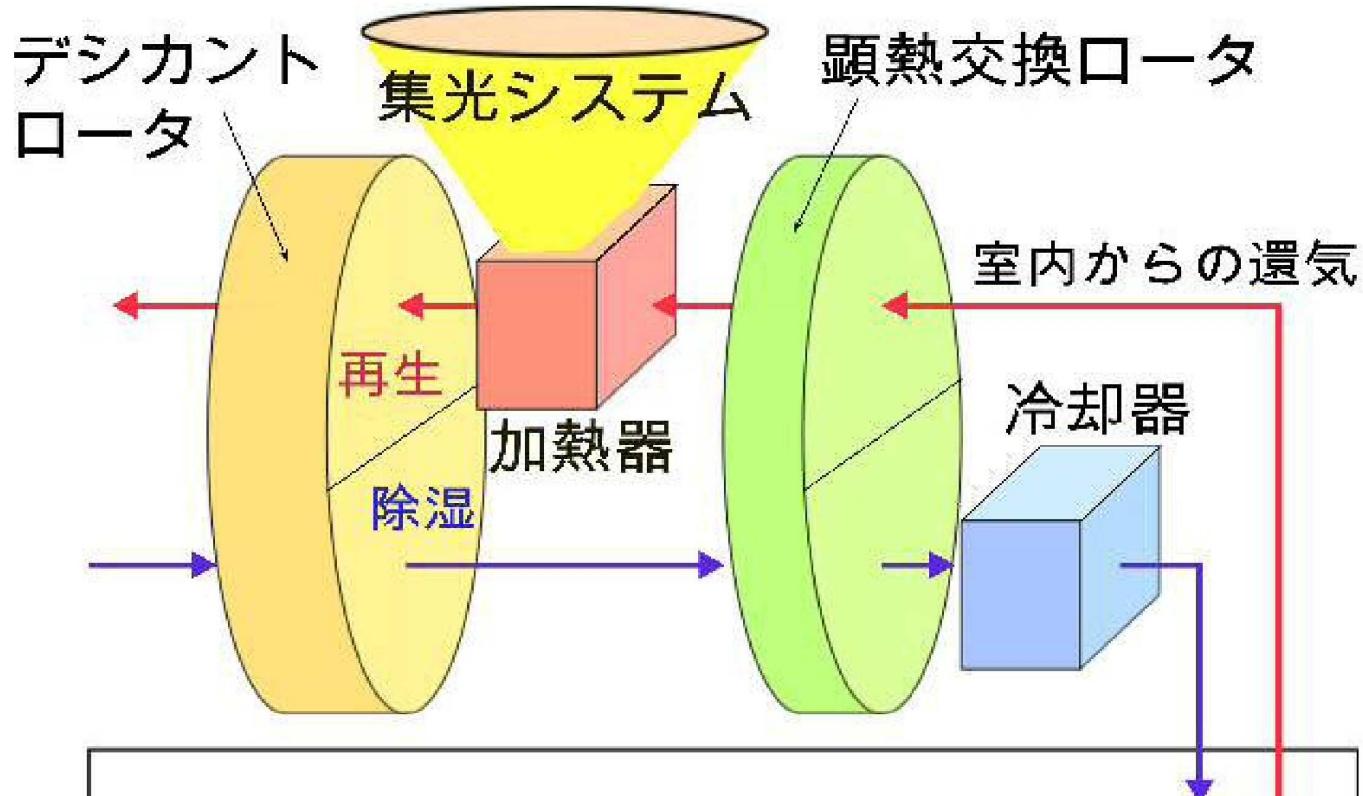
これまで形になったもの
企業の後押し⇒自治体も動いて補助金枠が生まれ
ペレットストーブ、ペレットボイラの普及加速中



これからの活動

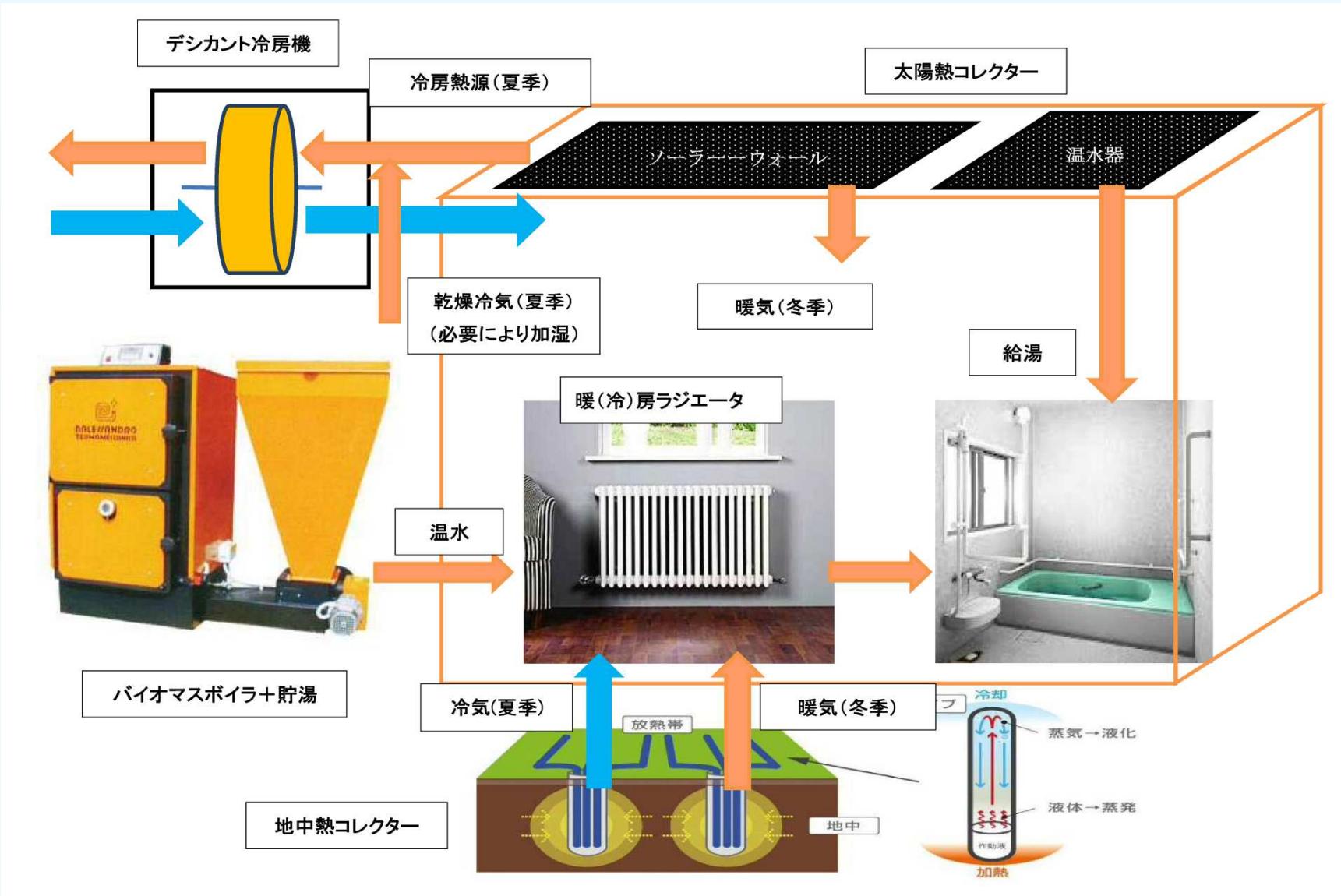
- 地元企業や組合などによる、薪、木材チップを含むバイオマス燃料の生産拡大を後押し
- バイオマス燃焼機器(ペレットストーブやペレットボイラ)についても地域企業での開発・製造の後押し
- 太陽熱、地中熱の小規模利用の拡大
- デシカント冷房の小型化にも取り組む
- 先ずは、近々建築予定の自宅で可能な限り盛り込んでみる

これからの活動(デシカント冷房の小型化)



顯熱ローターを組み合わせたデシカント空調のシステムの例

これからの活動(北国型ゼロエミ住宅の実現)



ご静聴ありがとうございました